

制度の政治思想史

—松元雅和『応用政治哲学—方法論の探究』（風行社、2015年）を読む—

世話人・司会：安武真隆（関西大学）

報告者：井上彰（立命館大学） 犬塚元（法政大学）

討論者：松元雅和（関西大学） 山岡龍一（放送大学）

参加者数：40 名程度

近年の政治哲学の規範研究の興隆には目を見張るものがある。その中でも英語圏における分析的政治哲学の動向は、今や世界大の影響を及ぼすに至っている。本セッションは、その中でも近年公刊された意欲作、松元雅和『応用政治哲学—方法論の探究』（風行社、2015 年）を取り上げ、分析的方法を中心とする特定の方法やアプローチが、その応用的課題に関してどのような役割を果たしうるのか、また、政治学、ないし政治哲学の方法論的精緻化や制度化とどう関わるのか、またそれは政治思想史の方法論といかに関わるのか、改めて検討することとした。

本セッションでは、まず政治思想史研究における方法論的自覚化について考察を進めている犬塚元氏と、分析哲学の分野で積極的な発信を試みている井上彰氏が、本書の概観と批判的コメントを展開し、続いて、著者の松元雅和氏からの応答や、同氏との共同翻訳（デイビッド・レオポルド／マーク・スティアーズ編『政治理論入門—方法とアプローチ』）も手がけた山岡龍一氏からのコメントをも踏まえ、更なる討論を進めた。なお、世話人としては、論点を明確化する為に、登壇者に対して、敢えて論争的・挑発的に臨んで頂くよう、予め要請していたことを付け加えておきたい。

まず犬塚報告は、政治思想史・歴史学という対極的なディシプリンの観点から、本書が明晰性を重視する点に共感しつつ、「合理的論証」を通じて「世界に関する客観的知識」を目指す点で、最も Science（政治科学）に近い学知の試みとして位置づける。それは、データに立脚して合理的で客観的な命題の獲得を目指す点で、「超越的」な政治哲学とも区別される。さらに、本書における政治哲学の基本的方法のうち、価値に関する基礎的データから一般的規範原理を導く仮説的演繹法について、基礎的データ自体の多様性や、データ自体が観察者によって構成されることによる認識の歪みや存在被拘束性が軽視されているのではないか、「1984 年」の様な世界において、かかる政治哲学の方法は有効か、さらに「一般的規範原理」自体の複数性をどう評価するのか、といった疑問が提起された。加えて、本書における政治哲学とデモクラシー（専門知と一般市民との関係）との結びつきが必然的なものと言えるのか、また、「歴史哲学」に対する反省から、「法則的説明」を回避し、一回限りの過去の現象を明晰に・合理的に説明することを志向する歴史学との関連や、文脈主義化を進め、分析研究の一種とも位置づけうる政治思想史研究への言及のないことの妥当性についても疑念が提起された。

次に井上報告は、分析哲学の観点から、分析的政治哲学の方法を解明し、理想理論に留まらず、非理想的状況への「応用」に焦点を当てた理論の重要性を強調した、と本書を要約した上で、望ましい理論そのものはあまり主張されておらず、その正当化のためには価値論が不可欠ではないか、と疑義を呈した。またコーエン（政治哲学の「特権性」を振りかざす）

とロールズ（規範研究を実行可能性等と感応的である）に対する本書における対照的な評価の根拠づけに対しても疑問を投げかけた。さらに、研究者コミュニティの実態を踏まえると、概念分析と規範分析との関係についていずれを分析的政治哲学の本丸と看做すべきかについても問題提起をし（前者を重視する井上氏に対して松元氏は後者）、本書が分析的政治哲学上の重要な争点を隠すことになっているのではないかと異論を唱えた。さらに本書の応用部分において、非理想理論の重要性を強調すべく、コーエンとロールズとの対立を調停しようとする姿勢に対して、結果的に概念分析的契機を軽視することになるのではないかと、両者の差異ではなく、同意点に注目する本書の根拠についても改めて著者に問うものであった。

両コメントに対して、著者の松元氏は、本書の議論の対象が現代の英米圏の規範的政治哲学とその応用に限定されており、他のタイプの政治哲学や、思想史研究の可能性や存在を否定している訳ではないことを指摘し、論証へ注目する分析的アプローチが、規範研究において妥当な結論を導くための適切な方法と考えるのが本書の立場であるとした。具体的に、松元氏は、1960年代後半以降における、公民権運動、反戦運動や人工妊娠中絶などの現実的問題に対して価値判断を下す際の根拠となる議論をどう生み出すかという問題意識を背景として、「道徳的直感と体系的推論を組み合わせれば、現実の規範的問題について、実質的な進歩を成し遂げることが出来る」との確信を持っていたコーエン、スキャンロン、ネーゲル等の SELF の研究グループの活動が念頭におかれているとした。

次いで犬塚氏の疑念に対して、第一に、基礎的データの客観性・信頼性の限界は同意しつつ、データの信頼性に固執することにも弊害があり、それを前提としないと議論が進まないし、様々な改善策が模索されていることを指摘した。第二に、哲学と民主主義との関係については、専門値の役割については限定的に捉えており、専門家に向けて書かれることを前提としているとし、第三の思想史との関連については、規範研究として現実の問題に対して妥当な結論を導くにあたって、歴史的アプローチがどのように貢献しうるのかとの逆質問が出された（関連して、分析哲学から解釈学や思想史に転向した論者に着目することで、分析的アプローチの限界が見えて来る可能性がある）。

続いて井上氏の疑念に対しては、概念分析の役割について、ロールズ自身の言明・認識に基づく限り、概念分析を中心とすることには無理があるのではないかと応じ、規範研究としてどのような概念分析の役立て方があるのか（あるいは、研究者コミュニティの実態として思考実験の役割も挙げられないか）、と逆質問もなされた。さらに非理想理論については、理想理論の範囲について井上氏の理解と齟齬があることが示唆され、理想理論の展開が不十分であることについては、本書の弱点と言えることが確認された。

最後に、山岡氏からは、分析的政治哲学が近年急激に進展していることを歓迎しつつ、超越的政治哲学（イデア）への批判という点で、犬塚氏と松元氏との間の共通性が指摘された。両者において類似している方法論的関心は、ある主張が公共的に正当化できるかどうかへの関心とも整理できる。松元氏が展開する分析的方法の利点は、科学的な再現可能性にあり、原則上誰でもシェアできる方法の探求にある。その限りで、分析的方法は、規範そのものの共有ではなく、規範に向かうアプローチを共有することで、協働可能性に、あるいは市民的あり方に開かれている、と評価する。ただし、山岡氏は、形而上学や宗教が追求する公共性もあるし、科学的方法とは別の反省性もありうるのではと指摘し、さらに、基礎データの取扱いについては、観察データと理論との関係にある非決定性（クワインにおける経験主義における二つのドグマ）を弱めるのが、政治哲学者か民主主義かが問題となるとした。またロ

ールズに即して考えれば、基礎データについては思想史の貢献が可能ではないか、さらに、分析哲学から脱却し思想史の方向に向かった論者は当時の世代には多くいたとの指摘があった。

続いて山岡氏は、同じ分析哲学のフィールドにいる松元氏と井上氏とを、アリストテレスとプラトンとの対立になぞらえてその特徴を整理した。概念分析においてデカルト的明証性・分析・総合への指向性が伺える井上氏の研究スタイルとは対照的に、松元氏の研究は、ポパー以降の科学論を前提とし規範意識が強いが、ドクサから出発するアプローチに加え、複数の選択肢を提示する点で、アリストテレス（ウィリアムズ）的な方法論的多元論にも近い。さらに、最終的に唯一の判断に収斂せず、判断を現場に委ねるという点でも、立論の正当化に専念するのではなく、そのような立論を展開していくこと自体が間接的に正当化に寄与していく、というスタイルを採用している点でも、アリストテレス的な実践学に近い。その限りで、本書における教育論と平和論を扱った箇所の重要性が強調された。

ただし、実践学として不徹底な面もあり、政策科学に対する拘りや実用性の強調が、果たして多元性とどこまで両立するのか、むしろ制作学に接近しないか、という疑念が表明された。また理想理論と非理想理論との関係については、松元氏における両者の分別に恣意性が介在する危険性を指摘しつつ、前者が後者のために構成される、という見方が披露された。

松元氏からの逆質問に対して、犬塚氏は、規範研究に対する思想史の貢献について、少なくとも過去において思想史研究が規範研究に寄与すると信じられていた時期があったことを指摘し、井上氏は、ロールズ概念分析に対する留保は、当時の文脈の中で理解されるべきで、確かに論理実証主義的な概念分析に対しては批判的だったかもしれないが、字義通り受け止められるべきでは無い、と応じた。その後フロアからは、国内政治哲学と国際関係における、ロールズとウォルツァーとの対比、普遍的な言明の歴史性、先進諸国に専ら適用されるという限界が本書にあるのか、本書の方法論は法則性に直接向かうのではなく、实在論や自然主義的方法と近接するのではないか、法概念論をめぐる、ハートとドゥオーキンとの対立が、規範分析や概念分析との対抗と類似していないか、井上氏に対して、概念分析を重視するとしても、価値を扱うことが前提で、それを対象とする分析に限られるのか、分析的というのは、価値に限らない筈、概念そのものの分析もあり得るのでは、犬塚氏に対しては、テイラーの様な思想史は評価できるのか、他の仕方で思想史が貢献できるのか、「エッセー」スタイルの思想史研究の意義とは何か、等、多くの論点が提起された。最後に山岡氏は、共約不可能な価値の対立に対して、同意のないところで共存する必要性をめぐる、政治的リアリズムの問題意識の紹介がなされた。

本セッションはまた、小田川大典、安武真隆、犬塚元らが中心に行なっている共同研究の一環として行われる研究会である。2015年のセッションでは鹿子生浩輝『征服と自由』を、2014年は安藤裕介『商業・専制・世論』を取り上げたが、今回もまた、近年公刊された政治制度に関わる意欲的な単著を取りあげ、その合評会という形式を採用した。今回は、セッション終了後も登壇者や参加者の議論が止まらず、有志十数名が別会場に移動して、政治理論や政治思想研究の今後のあり方について、熱のこもったやり取りが7時間にわたって続いたことを付記しておきたい。本セッションを通じて、政治・社会的論点について問題意識の共有が図られるとともに、意見交換と討論の場が一層開かれていくことを願ってやまない。